

世界一有名かつ豪華な（客）船は、長い間興行収入世界 No. 1 の地位を保っていた『タイタニック』（97年）で世界的に有名になったタイタニック号だが、アダマン号はパリのセヌ川に浮かぶ木造の船。小さな橋を渡って船に乗り込む方式で、船は接岸されたままで動かないものだ。私の事務所は淀川の近くにあるが、そこは中之島公会堂やバラ園、そして天神祭りや桜並木で有名な地区。そして、淀川にはボート教習所などの係留された船が沢山浮かんでいる。そう考えると、川の大きさからしても、ゆったりした川の流れからしても、スクリーン上に見るアダマン号は淀川に浮かぶ各種船舶と同じようなものだ。

本作冒頭に登場するのは、そのアダマン号の中で開かれているライブの姿。1人のおっさん（じいさん？）が力強く歌っているその姿は実に見事だが、その立ち居振る舞いは少しヘン？また、観客はじいさん、ばあさんばかりだから、この船は一体ナニ？

本作の最後には字幕でも説明されるが、スクリーン上を見ていて少しずつわかってくるのは、アダマン号はユニークなデイケアセンターだということ。そこでは、精神疾患のある人々を無料で迎え入れ、創造的な活動を通じて社会と再びつながりを持つようにサポートしているらしい。ええっ、フランスではそんなことができるの？日本では、淀川に係留した船内でデイケアセンターを行うことなど、とてもとても・・・。

■老人のケアには、在宅よりもこんな集団の方が！■

日本の少子高齢化問題は深刻だが、それはフランスでも同じ。現在74歳の私も近い将来、老人介護が必要になるが、老人介護はとにかくしんどいから、その働き手は大変だ。去る3月29日に見た『ロストケア』（23年）（『シネマ52』217頁）では、模範的と思われた介護士が「救うため」と称して多くの介護老人を殺害していたが、その殺害現場は在宅介護のケースが多かった。

日本は民主主義の先進国のような言い方をしているが、実は西欧の民主主義国に比べれば相当な後進国。その国民性も、国王やマリー・アントワネットの首をギロチン台に送りこんだフランス国民のそれと日本は大違い。その最大の相違点は言論。つまり、正々堂々と自分の主張を述べ、議論を戦わせるという“言論”の未熟さだ。そのことは政治集会はもとより、大学の授業からマンションの管理組合総会に至るまで、さまざまな会議の姿を見れば明らかだ。

『ロストケア』で見た介護老人はみんな従順で介護士の言うことをよく聞いていたが、さてアダマン号の中に集う“要デイケア老人”たちは？スクリーン上に次々と登場する、じいさんばあさんたちの口の達者さと“芸達者”ぶりにビックリ！

■ニコラ監督に注目！ニコラ監督のこんな視線に注目！■

私は全然知らなかったが、本作を監督したニコラ・フィリベールは“現代ドキュメンタリーの名匠”らしい。そしてまた、多様性が叫ばれるずっと以前から、社会的マイノリティーとされる存在や価値が共存することを淡々と優しい眼差しで捉え続けてきたらしい。私はそんな視線や価値観には賛成だが、他方、「〇〇に共感を！」とか、「〇〇に寄り添お

う！」という類の（単純な）主張には異議がある。

しかし、109分間に渡って描かれる、アダマン号の船内に見るじいさん、ばあさんたちの姿はそうではなく、老人たちの言論と行動のパワーに圧倒されるはずだ。何らかの病のある人を迎え入れることは何かと抵抗があるもの。ましてや、精神疾患のある人々はトラブルの芽になりやすいのでは？そう心配するのが普通（日本的？）だが、さてアダマン号の船内では？ニコラ監督は、精神科医療の世界に押し寄せる“均一化”、“非人間化”の波に抵抗して、共感的なメンタルケアを貫くこの場所を「奇跡」だと述べているそうだが、たしかにその通り。ドキュメンタリーなればこそ、アダマン号に結集する“要デイケア老人”たちのあっと驚く言論とパフォーマンスを、ニコラ監督の視線を通してしっかり味わいたい。

2023（令和5）年5月2日記